

弘前と遺愛女学校の音楽教育 Hirosaki and Music Education at Caroline Wright Seminary

安田 寛* ・ 北原かな子**
Hiroschi YASUDA ・ Kanako KITAHARA

論文要旨

明治十五年に函館で開校した遺愛女学校は、当初生徒が集まらず、募集に応じた生徒の多くは弘前出身であった。こうした事情により、函館のメソジストミッションの音楽教育は、弘前の音楽教育と直接つながることになった。本稿では弘前での洋楽受容史を理解する一端として、遺愛女学校で行われた音楽教育について、女性宣教師の報告などから明らかにする。

また、弘前での音楽教育普及に関して重要な役割を果たしたと見受けられる長嶺サダについて、その経歴を明らかにする。長嶺サダは盛岡出身で、岩手県より選抜されて東京女子師範学校に学んだあと、師範学校の教員、函館遺愛女学校教師を経て、八八年に本多庸一と結婚した女性である。彼女は、東京女子師範学校では、文部省お雇い音楽教師から、最新の唱歌教育をも学んでいた。文部省がはじめたばかりの唱歌教育と函館居留地でのミッションの讃美歌教育という、当時の新しい西洋音楽教育を二つながら体験した女性として、洋楽受容史から見てもサダは重要な人物である。

キーワード：洋楽受容史，遺愛女学校，弘前女学校，長嶺貞

弘前と遺愛女学校

一八七四（明治七）年一月に宣教師M・C・ハリスの着任で函館での伝道活動を開始したメソジスト監督教会（Methodist Episcopal church 1874-1939）^{註1}は一八八二年二月一日に遺愛女学校（Caroline Wright Seminary）を開設した^{註2}。しかし「生徒を集めるのが容易でなかった」。そこでハンプトン先生は、わざわざ弘前まで出張して生徒を集めるという状態であった^{註3}。そのころ弘前では東奥義塾の女子部が廃止されたところであった。そういう関係で、耶蘇の学校ということで生徒集めに苦勞した遺愛女学校に弘前から多くの女生徒が進学した。第一回と第二回の卒業生はすべて弘前出身であるし、第三回から第十回までの卒業生も弘前出身者が多かったと伝えられている^{註4}。一八八六年七月二〇日付けのハンプトン（Miss Minnie S. Hampton）の手紙によれば、「学校は七月十四日に閉校、少女達は蒸気船で（津軽）海峡を渡り他島（本州）に行った。……当地には九名残すのみ」（本多繁訳）とある^{註5}。手紙が伝えるように寄宿生六十一名の大部分が本州に帰っていった^{註6}。おそらくその多くが弘前とその周辺から

* 弘前大学教育学部音楽科教室

Department of Music, Faculty of Education, Hirosaki University

** 東北大学大学院国際文化研究科博士課程

Graduate School of International Cultural Studies, Tohoku University

の生徒であったろう。

なぜ弘前から多くの生徒が遺愛女学校に行ったのか、『遺愛女学校創立五〇年略史』は、「弘前は東北地方で最も文化の進んだ土地であるから」とその理由を説明している^{注7}。遺愛女学校は場所からすれば函館の女学校であるが、生徒という中身については弘前のための女学校と言いうような学校であった。

こうした遺愛女学校と弘前との関係によって、弘前の洋楽史と函館の洋楽史が直接繋がってくる。遺愛女学校の第一回卒業式は一九〇〇（明治二三）年六月で、卒業生として珍田みわを出し、九月九日の第二回卒業式には山田（高谷）トク、中野ウメの二人を出す、すでに述べたように三人とも弘前出身であった。三人のうち山田トクは卒業式でオルガン演奏を披露した^{注8}。この山田も最初の卒業生珍田も、弘前女学校で教師をした^{注9}。こうして、彼女たちが函館で受けた音楽教育は、そのまま弘前に受け継がれるということになった。そんな彼女たちが受けた函館の音楽教育とはどのようなものだったのであろうか。

遺愛女学校の音楽教育

開校した年の年報によると、夕方になると教室で集会を開き、一人一人日本語の新約聖書の一節を繰り返し、讃美歌を歌い、主の祈りを繰り返し、最後におやすみを言って終わった、とある^{注10}。

一八八五年の年報に掲載された、この年の六月一五日のミス・ハミスファー（Miss Florence H. Hamisfar, M. D.）の手紙によると、学校では人々は、朝四時に活動を始めた。朝食もそこそこに七時半には彼女は部屋を出て、一時間半ほど教室で少女達と歌って過ごした。十二時からは十五分間の礼拝があって、この時もオルガンに合わせて讃美歌を歌った^{注11}。

同じ年報に報告を寄せているミス・ヒュエット（Miss Ella J. Hewett）は、寄宿生は六五人で、オルガンが一台しかないの、音楽のレッスンが十分に行えない、もう一台送って欲しい、と訴えた^{注12}。

笹森建英氏らの研究によれば、この八五年に、第一回府県派出伝習生として音楽取調掛で学んだ傍島万年（マネ）が青森師範学校に務めはじめた^{注13}。文部省側の音楽教育の広がりやミッションの教育を比較する上で、これは注目される。師範学校在学中に万年から学んだ山中嵯峨之助が弘前の和徳小学校で唱歌を始めるのは、一八八七年五月であった^{注14}。その当時、万年の講習会に出席した教師の、「君が代と紀元節の式歌を習って来たら、弘前の各小学校の先生方の唱歌の講師に引張られて弱ったことがある。もちろん楽器などないし、あっても弾けないので、手を打って拍子を取り、口うつしに教えた」という回想は、文部省側の音楽教育の当時の水準をよく現していると思われる^{注15}。

さて、八六年の年報によると、ミス・ヒュエットは十人の少女にオルガンのレッスンを行った^{注16}。同じ年の宣教雑誌「異教婦人の友」四月号に掲載された彼女の書簡によれば、オルガンを習いたがっている少女は他にもたくさんいるが、オルガンが一台しかなく練習する時間がとれないので、レッスンが出来ない状況であった。声楽は全員が参加し、学校の授業は毎朝七時四十分から八時までの二十分間の声楽から開始された^{注17}。

八七年には、オルガンのレッスンを受けている少女は十二人に増えていた^{注18}。一台しかないオルガンで苦勞していたヒュエットは、雑誌「異教婦人の友」に掲載された同年一月の書簡で、当時の音楽教育の様子について次のように述べた^{注19}。

「学校にオルガンが一台しかない不便について言いました。母国の婦人たちの親切で補充していただきました。昨年の春にはフィラデルフィア支部からいい音のするエステが届きとても喜びました。昨年の秋にはライト夫人がメーソン・アンド・ハムリンを送って下さり、少女たちはとても喜びました。それはクリスマスの直前に届きましたので、わたしたちはそれを喜んでクリスマス・イヴのプログラムに取り入れることに決めました。オルガンはイヴに私たちの歌唱を力強く、明瞭な音で導いてくれました。また、少女たちが弾く独奏や二重奏のタッチに応じてくれました。昨年のクリスマス会ではオルガンが弾ける少女は一人だけでした。今は七人います。彼女たちは本当に上手だと思います。彼女たちのレッスン時間は一週に半時間で、毎日半時間の練習をします。彼女たちは学校で、行進の時や、体操の時に弾いてくれますので、とても助かっています」

彼女は、また、日曜学校の授業の様子を伝えている。ここで伝えられた様子はおそらく典型的なもので、あとで弘前とその近郊にも同じような日曜学校が開かれるので、彼女の報告する日曜学校の授業風景に注目してみたい^{注20}。

「私は、私の先生と二、三人の年長の少女といっしょに出かけます。私たちは讃美歌を歌うことから始めます。子供たちがぜんぜん集まっていないこともあります。子供たちはすぐに集まり、三〇人か四〇人くらいがやってきます。ほとんど子供たちですが、数人の大人の男性や女性が混じっています。私たちは歌唱に続いて、短いお祈りをし、絵を見せながら、聖書の真実についてのやさしい話や物語をし、教理について質問し、主の祈りをします。最後に歌って解散し、聖書カードを配ります」

ここに描かれてあることは、いわゆる日本の大衆にいち早く西洋の歌曲を届けたのは、日曜学校のようなミッションの活動であったことを物語っている。

八八年になると、全員が声楽のレッスンを受け、十七人がオルガンのレッスンを受けていた^{注21}。

弘前から遺愛女学校にたくさん入学した女生徒は、このような音楽教育を受けていたのであった。

弘前の女学校と音楽教育

話しは少しさかのぼるが、ヒュエット宣教師がハンプトンと一緒に弘前を最初に訪問したのは、一八八六年のことであった^{注22}。彼女は、一週間の間に、「昼間学校を二度訪問した。われわれの生徒三〇人の家を訪問し、婦人のための二つの大きな集会を開いた」と報告している。

彼女が言っている昼間学校は、この年の六月二五日に弘前教会堂を使って開校された学校であった^{注23}。ミッション側からみれば、この学校は函館の遺愛女学校の予備課程であり、最上の生徒は選抜のうえ進学するという位置づけによって、Preparatory Caroline Wright Memorial School と呼ばれていた^{注24}。

八七年にヒュエットがこの学校の担当になったが、実際に訪問できたのは一度だけで、あとは文書で通信し監督していた^{注25}。そのヒュエットによれば、「学校を開いてから一年と少し経ちました。在校生は今のところ四〇人です。でも女性宣教師を一人送れば、その数がすぐにでも百人かそれ以上になると思います。

私は、私の先生の真摯さと情熱に触れないでこの報告を終えるわけにはいきません。彼女なしで仕事をするなど考えられませんし、私が従事している仕事の殆ど全てを助けてくれま

す。彼女は子供たちを扱うのがとても上手です。そしてそのなかの何人かを集めて聖書のお話を聞かせたり、讃美歌を教えたりしているときは、このうえなく幸せそうにしているのです」といった光景が展開されていた^{注26}。これが、弘前の少女たちに讃美歌が教えられていたことを示す記録の最初のものではないだろうか。『弘前女学校歴史』の山鹿の稿によれば、教師は、長嶺サダ、白戸さだ、成田らくの三人であった^{注27}。

翌、八八年には宣教師によって婦人会が組織され、記録では確認できないが、弘前の婦人達は讃美歌を歌っていたに違いない。この年の冬、おそらくクリスマスの少し前に、昼間学校にライト夫人から人形とミシンと一緒にオルガンが送られてきた^{注28}。

九〇年度の弘前についてのレポートには、新しい日曜学校が Arumachi に開かれた。メソジストの婦人海外伝道会 (W.F.M.S) に全面的に支えられていたこの学校は、路上の子供をたくさん獲得するのに成功した。冬の間、出席者は日曜毎に増加した。時には大人を除いて一九八名に達した。彼等はとくに歌唱に魅了されている、とある^{注29}。また、弘前にある別の日曜学校では聖書婦人の海野ヨネによって規則正しく礼拝が行われている、と報告されている^{注30}。

弘前女学校が開設されたのは、一八八九年六月二五日であった。開校式ではライト夫人から寄贈されたオルガンが演奏され、七〇人前後の生徒と出席者全員で讃美歌を歌った^{注31}。教員の中でオルガンを弾ける可能性があったのは、副教頭の本多（長嶺）サダと教員海野ヨネであろう。

海野ヨネは、「弘前教会に務めていた婦人伝道師」で築地居留地にあった海岸女学校、後の青山女学院を卒業した^{注32}。一八八八年に本多庸一と結婚した長嶺サダ（一八六二～一九二〇）については、節を改めて述べることにする。

本多（長嶺）貞

先に弘前で讃美歌が歌われた様子を述べた最初の記録として、一八七七年のヒュエットの次の報告を紹介した^{注33}。

「彼女は子供たちを扱うのがとても上手です。そしてそのなかの何人かを集めて聖書のお話を聞かせたり、讃美歌を教えたりしているときは、このうえなく幸せそうにしているのです」

ここに「私の先生」としてヒュエットの眼を通して生き生きとした姿が伝えられている女性こそ、ヒュエットと一緒に伝道活動をした長嶺貞（サダ）であった。貞が兼松しほと入れ替わるようにして遺愛女学校にやってきた時のことをヒュエットは期待を込めてこう書いた^{注34}。

一八八六年に、「望んでいた教師をようやく雇った。彼女は若いけれど、教師の経験があり、東京の師範学校の卒業生です。彼女は教師としてだけでなく、熱心なクリスチャンとして高い推薦を受けてやってきた」

長嶺サダはメソジスト派重鎮であった本多庸一との結婚後は良妻賢母としてよく家庭を守り^{注35}、また、夫と共に上京した後は矢島楯子や潮田千勢子等とともに矯風会の中心人物として廃娼運動などに貢献したことで知られる^{注36}。その一方で、このヒュエットの報告書にもあるように、彼女は日本が洋楽を受容し始めたごく初期に本格的な音楽教育を受けており、讃美歌など西洋音楽にもよく通じていた。若い時期には、出身地盛岡を初めとして、函館、弘前で明治十年代後半から二十年代にかけて讃美歌を初めとした音楽教育を行った人物でもあったのである。ここでは、弘前で本格的音楽教育を始めた中の一人と考えられる長嶺サダの、弘前女学校に着任するまでの経歴について述べる。

長嶺サダは文久二年（1862）一月九日、盛岡藩士族長嶺忠司の二女として生まれた^{注37}。これまでのところサダが基礎教育をどこで受けたのか明らかではないが、サダの名前が岩手県教育関係資料に出てくるのは、明治九年六月二三日の志家学校仮教師としてである。翌十年にはサダは同校の首座教員となっている^{注38}。ここで、長嶺サダが採用された時の状況や志家学校について簡単に述べる。

この志家学校とは、明治七年十月八日、志家村字帰命寺に旧民家を借用して設立された小学校^{注39}で、当時の岩手県唯一の女子小学校であった^{注40}。当時志家学校を含む盛岡市内の小学校は、七割から八割が士族の子弟であった^{注41}。開校後間もない明治八年二月に岩手県令宛てに出された伺書に記載された志家学校教師は二名で^{注42}、また、明治八年六月十五日の「第一大区一番扱所轄六学校仮教師並助手生徒掛増給」に関する願書には、志家学校教師米沢とき、生徒掛片山みよの名が記載されている^{注43}。

学制発布当時から明治十年にかけての岩手県の場合、教員はほとんど仮教師として採用された士族や旧寺子屋師匠であり、また多くは男性教師で、女性の教師は極めて少なかったとされる^{注44}が、ここに名前が見受けられる米沢ときと片山みよも、志家学校の教師及び生徒掛に採用される以前は、寺子屋の師匠であった。両名とも寺子屋を始めたのは嘉永年間であり、志家学校教師となった時点では、かなりの年配であったと推定される^{注45}。これに対して長嶺サダが教師として採用されたのは、先に述べたように明治九年六月二三日のことであり、このときサダは僅か十四才であった^{注46}。給与は二円五十銭なので、明治八年十月十四日に制定された教員の等級表^{注47}によると五等教師である。しかしきわめて若い上に、翌年には先輩教師で四等教師であった米沢とき^{注48}を追い越す形で首座教員に抜擢されていることが注目される。さらに、この明治九年当時岩手県下の小学校の中で、女性教師は、志家（盛岡）二、開城（岩谷堂）一、前沢一、塩釜（水沢）二、など県全体でもわずか六名を数えるのみであった^{注49}とされる。

長嶺サダが採用された時点でのこれらの状況は、彼女がいわば学制発布後の旧来の寺子屋師匠から近代学校の教師へと変わっていく、小学校教師新旧交代の時期に、時代を担う若手女性教師として抜擢された人物であったことを窺わせる。かなり優秀な資質をもつ教師として認められていたものと思われる。

長嶺サダが志家学校に教師として勤務したのは、明治九年六月から明治十一年初めまでの僅かの期間であった。『岩手県教育史資料 第二集』には、明治十年以前の女性教師が主として「裁縫・手芸・唱歌などを受持った」^{注50}とあるが、実際に唱歌をおしえたかどうかなどの、具体的事跡は不明である。ただし、岩手県の場合、藩政時代、すでに「唱歌」として小謡や番謡を教えている寺子屋がある^{注51}ので、これらの音楽を「唱歌」として教授した可能性は否定できない。いずれにしてもサダは明治十一年二月九日に志家学校を退職した^{注52}。正式に退職の辞令が出る以前の明治十一年一月に、サダは菊池ノブと共に東京女子師範学校に入校願を出している^{注53}。

長嶺サダが東京女子師範学校で学んでいる間に、岩手県では女子師範学校を設置する動きがでていた。明治十三年十二月六日には女子師範学校設置伺が提出されている^{注54}が、そのなかには、従来師範学校へ女子も入学している状況で極めて不便であることを述べたうえで、次のように書かれている。

幸い本県より志願にて、曩に東京師範学校へ入学致居候菊池ノブ・長嶺サタ（出発之節、旅

費等御支給相成候事)の兩名、来十四年は卒業の上帰県可致候間、旁以女子師範学校御設立相成可然哉。御決議の上は十四年度地方税予算へ組込、説明書等取調之積、此段相伺候也。^{註55}

菊池ノブ、長嶺サダが、岩手県女子師範学校設立に関して重要な存在であったことがわかる。当時の岩手県においては、女子師範学校設立は緊急の課題ともされていた。例えば、同十三年文部省に提出された学事年報には、女子教育の不振の原因が、学校で裁縫や手芸など女子に必要な教養である女紅を学ぶことが出来ないことにあるとしている。従って各校に女紅科を設置することが必要であり、そのためには女子師範学校設立が「今日最も緊要の条件」と指摘している。^{註56}こうした経過を経て明治十四年に文部省に提出された伺書には、小学校中等科では、特に女生徒のために「裁縫、女礼」を設けることが提案された。^{註57}ここではその内容も細かく規定されている。ただし、「女礼は教授法の整う迄当分之を欠く事を得」^{註58}ることになっており、事実上、「女礼」教育の開始は長嶺サダの帰郷をまっている状態であった。

明治十四年五月二四日、皇后陛下が東京女子師範学校を訪れた。その時の模様をメーソンの通訳として同行した岡倉覚三、後の天心の手紙で辿ってみると、この日の「朝八時半に皇后の乗り物と随員が、校門で二列に並ぶ女子学生に出迎えられました」^{註59}。この列の中に、おそらく長嶺サダがいたものと思われる。というのは、この日の生徒代表の一人として長嶺が選ばれていたからである。「学校の摂理の福羽氏は陛下を応接室に案内し、そこでメーソン氏が紹介された。皇后はメーソン氏に日本に新しい音楽を導入する苦勞に感謝のお言葉を下さいました」(中村理平訳 以下同様)。この日の皇后の行啓は、文部省のお雇い音楽教師メーソンの臨席のもと、前年から女子師範学校で続けられていた唱歌の実験授業の成果が披露されたことで、洋楽史にとって重要な日であった。

皇后は最初、幼稚園をご覧になったあと、次に、師範学校の授業を見学された。この時、「長嶺さだ」は、小学校第十一級「読法」を担当した教生として参加した^{註60}。

岡倉の説明によると「昼にはメーソン氏は太政大臣やその他の方と食事を同席されました。年長クラスの学生は介添えの役目を果たしました。彼女らはすべて日本人と西洋人の間の新式の和洋折衷のエチケットの訓練を受けています」

後に、岩手師範学校で女礼を担当した長嶺は、東京女子師範学校で学んだこのようなエチケットが役に立ったことであろう。

午後一時からは講堂で本科生による唱歌が披露された。「陛下がお入りになるとオーケストラがイタリア国歌“Queen Heaven”を演奏し、そして女生徒は起立して陛下が金色の布地を掛けた演壇につくまでお辞儀を続けていました。(中略)生徒たちは歌いはじめました、(1)『Long May the reign』(2)『Charming Little Valley』(3)『Moral Song 1』」

こうして当時最先端の唱歌教育を身につけた長嶺サダは明治十六年三月に帰郷、未だ女子師範学校が設置されていなかったため、従来の師範学校の一部を女教場として、菊池ノブと共に付属小学校の生徒に唱歌教育を行うと共に、中等科以上の女生徒には女礼を教授した。サダの教えを受けた学生達の進歩は著しく、「日常の応対進退から、その他儀式の作法に至るまで、よく教師の教えを守りよくこれを活用し、すこぶる成果の見るべきものがあり、一見して付属小学校の生徒であることがわかった」とされる。言うまでもなくこの時点で女礼と唱歌を教授できた人物は長嶺サダだけであり、以上のことから長嶺サダは、岩手県下の女子教育草創期にあ

って、大きな役割をはたした人物であったといえるのである。

注

- 注1 “Missionary Society (MEC) [1819/1820-1907] The Missionary society was organized on April 5, 1819 in New York, and became an official agency, through General conference action, in 1820. The purpose of the organization was to enable the several Annual conference to more effectively spread the Gospel and to aid them in their benevolent and charitable work in both domestic and foreign missions.” Patterson, Dela, ed. Mission Agency Histories. General Commission on Archives and History, United Methodist Church, 1995. p.2.
- 注2 函館新聞630号（明治15年2月2日）。作山宗邦「新聞にさぐる明治期の遺愛女学校一失われた高史を求めて一」（『函館私学振興協議会函館私学研究紀要—中学・高校編—』第15号, 1983年）p.126。七十五周年史編纂委員編『遺愛七十五周年史』（遺愛女子高等学校, 1960年）pp.18-20。
- 注3 七十五周年史編纂委員編, 前掲書, p.20.
- 注4 遺愛女学校創立五十年略史編纂委員会編『遺愛女学校創立五十年略史』（遺愛女学校, 1932年）p.15. なお, 東奥義塾とは, 弘前藩藩校の後身として明治五年十一月に設立された私学である。明治七年末にメソジスト派宣教師ジョン・イングが教師として着任したことから, 同校からはメソジスト派の信者が多く出た。主として旧士族階級に男子中等教育を行ったが, 明治八年から女子部も設置した。東奥義塾女子小学科については, 安田寛, 北原かな子「弘前における洋学受容のはじまり」『弘前大学教育学部紀要』第79号, 1998, pp. 51-62. を参照のこと。
- 注5 本多繁『続・米国のプロテスタンティズムと日本人』（明治プロテスタンティズム研究所, 1994年）p.77.
- 注6 “HAKODATI.” Seventeenth Annual Report of the Woman’s Foreign Missionary Society of the Methodist Episcopal Church, For the Year 1886 (1886): 40-41. “School closed the 14th, and the girls went by steamer across the straits to the other island. We went to see them off. They go third class, and often do not have a very comfortable place, but it is for one night only. We have only nine girls here now, and it seems a little lonely after a year’s work, with 61 girls in the house. School closed with 61, and day scholars, making 77.”
- 注7 同上。
- 注8 函館新聞2832号（明治23年9月10日）。作山宗邦, 前掲論文, p.131。七十五周年史編纂委員編, 前掲書, p.26.
- 注9 「創立以来本校職員氏名」（『会報』第1号, 1917年）p.17.
- 注10 “In the evening we all meet in the school room, each one repeating a verse from the Japanese New Testament, sing a hymn and repeat the Lord’s Prayer. At the close we bid the girls good-night.” “Japan.” Thirteenth Annual Report of the Woman’s Foreign Missionary Society of the Methodist Episcopal Church, For the Year 1882 (1882) : 38-39.
- 注11 “At four o’clock people are astir, and at five o’clock the work of the day has commenced in earnest. Often as early six my door bell sounds, and patients begin to come I have hardly time for breakfast, but at 7 : 30 A. M. I leave and spend half an hour singing with the girls in the school room. At 8 o’clock the pastor comes from his home, a twenty minutes’walk from here, to conduct morning prayers, at which all the household are’present, and then

school is open for the day I am usually very busy all the forenoon in my dispensary, occasionally slipping away to visit a very sick person about whom I am anxious. I return to find the waiting room well filled. At 12 o'clock each day we have a prayer meeting in my study for the Missionaries. It continues only fifteen minutes, but it is indeed a helpful season. If I have patients I slip away from them, but they get the benefit of a hymn and the tones of my sweet organ." "HAKODATI." Seventeenth Annual Report of the Woman's Foreign Missionary Society of the Methodist Episcopal Church, For the Year 1885 (1886) : 41.

注12 "We have sixty-five pupils now. Eleven are day scholars. We are hampered in giving music lessons by having but one organ. How we hope another will be sent." *ibid.* : 42.

注13 笹森建英, 今井民子「明治期の和徳小学校の唱歌教育」(『弘前大学教育学部教科教育研究紀要』第一八号, 1993年) p.60.

注14 千葉寿夫『小学校現場の百年』(津軽書房, 1975年) p.121.

注15 同上, p.122.

注16 "In the school I have taught one class in English, have given lessons on the organ to ten girls" "REPORT. HAKODATE." Minutes of the Woman's Conference of the Methodist Episcopal Church in Japan (1886) : 15.

注17 "All we have vocal music, and a few have instrumental music. Only a few can take lessons, since there is but one organ in the school ; and many who would be glad to learn cannot, because there is no opportunity for more practice. (中略) The lessons begin each morning with vocal music, at twenty minutes before eight." "Notes from Caroline Wright Seminary." *Heathen Woman's Friend*, April 1886, 240.

注18 "In the school I have had classes in singing, drawing, penmanship, one class in English, and have given organ lessons to twelve girls. One hour and a half of each day is set apart for work in the language. Between these hours of teaching and studying come sundry duties such as visiting the girl's rooms to see if all things are order, if there are sick girls needing attention; a call to the sewing room to find how work is progressing there, or a look into the Japanese teachers' classes. The evenings are given to Bible lessons, prayer meetings, organ lessons and correspondence." "Miss Hewett's Report." Minutes of the Woman's Conference of the Methodist Episcopal Church in Japan (1887) : 19.

注19 "We also spoke of the inconvenience of having but one organ in the school. Through the kindness of the ladies at home, we are now much better supplied. Last spring we were made glad by the arrival of a sweet-toned Estey, sent out from the Philadelphia Branch. Last fall Mrs. Wright sent a Mason & Hamlin, with which the girls were delighted. It arrived shortly before Christmas Eve, where its strong, clear tones led us through our songs, and responded to the touch of the girls' fingers through solos and duets. Last year in our Christmas exercises, only one girl was able to play the organ; now there are seven. We think they do very well indeed. They only have a half-hour lesson every week, and a half hour for practice every day. They play for marching and gymnastics in school now, and keep very good time." "Tidings from Hakodate." *Heathen Woman's Friend*, April 1887, 257.

注20 "My teacher and two or three of the older girls go with me. We begin by singing hymns,

something without any children present, but they soon collect and perhaps thirty or forty will come in, most of them children, but among them several men and women. We follow the singing with a short prayer, easy talks and stories about Bible truths, illustrated by pictures, then we have catechism questions, the Lord's prayer, and dismiss with singing and distribution of scripture cards." "Miss Hewett's Report." , *ibid.*

注21 "All have lessons in vocal music, drawing, penmanship, knitting, and sewing; and the boarders have daily tasks in housework. Seventeen girls have taken lessons on the organ."

"Miss Hewett's Report." Minutes of the Woman's Conference of the Methodist Episcopal Church in Japan (1888) : 19.

注22 "In company with Miss Hampton I have made a trip to Hirosaki where we have a day school. We were away from home one week. In that time we visited the day school twice, called at the homes of thirty of our pupils, and held two large meetings for women"

"Report. Hakodate." Minutes of the Woman's Conference of the Methodist Episcopal Church in Japan (1886) : 15.

注23 弘前学院百年史編集委員会編『弘前学院百年史』(弘前学院, 1990年) p.17.

注24 "The day school at Hirosaki has increased to forty pupils. It is named the "Caroline Wright Memorial Preparatory School," the idea originating with themselves." "Miss Hampton's Report." Minutes of the Woman's Conference of the Methodist Episcopal Church in Japan (1887) : 18.

注25 "I have had charge of the Hirosaki day school. I have visited it but once on account of the distance, but have carried on my oversight through correspondence." "Miss Hewett's Report." *ibid.* : 19.

注26 "I cannot close without speaking of the earnestness and zeal of my teacher who is such a help to me in all I understand that I hardly know what I could do without her. She has a nice way with children, and never looks happier than when she has a number of them gathered about her telling them about the Bible or teaching them to sing a hymn. She seems equally at home in woman's work. This summer the people in Morioka asked her to spend her vacation there in work among the women, they paying her expenses. She went and we hear good reports of her work." "Miss Hewett's Report." *ibid.* : 19-20.

注27 弘前女学校編『弘前女学校歴史』(弘前女学校, 1927年) p.8.

注28 "Mrs. Wright, whose benevolence is so widely known, has not forgotten Hirosaki, and I had no sooner reached Hakodate last winter than she wrote that she and sent a large lot of dolls for next Christmas, and also an organ and a sewing machine." "Hirosaki." Minutes of the Woman's Conference of the Methodist Episcopal Church in Japan (1889) : 30.

注29 "Since our last report a new school has been opened at Arumachi. This school is entirely supported by the W.F.M.S. and has been successful in reaching many street-children. The attendance increased Sunday by Sunday and during the winter months we frequently had upwards of one hundred and ninety-eight children, besides many adults who were attracted, especially by the singing." "Hirosaki Evangelistic Work. Mrs. J. Wier's Report." Minutes of the Woman's Conference of the Methodist Episcopal Church in Japan (1890) : 23. なお,

Arumachi とは、現在「新町」と表記されている「荒町」（アラマチ）のことと推察される。「明治初年弘前市街図（明治4年7月末士族在籍引越之際地図並官社学商現在図による）」『弘前市史（全2巻）明治・大正・昭和編』、弘前市史編纂委員会、名著出版、昭和四十八年。

注30 “Time has also been given to the other Sunday School, that at Hirosaki being, held in the morning, thus enabling the Bible-woman, Unno O Yone San, to give regular services here also.” “Hirosaki Evangelistic Work. Mrs. J. Wier’s Report.” *ibid.*: 23-24.

注31 弘前学院百年史編集委員会編、前掲書、pp.45-44.なお、東奥日報（明治二二年六月二八日）参照。

注32 同上、p.34.

注33 注24参照。

注34 遺愛女学校に来る前の長嶺サダは「東京女子師範学校を卒業、在京中に一致教会の信徒となり、明治十七年盛岡に帰り、日本メソジスト盛岡教会で熱心な活動を」した。（本多繁「メソジスト監督教会婦人外国宣教会と明治前期に於ける日本での活動」『東北学院大学東北文化研究所紀要』第17号、1985年、p.31.）「十七年（千八百四十四年）春、紺屋町に移れり。此の時に当り、長嶺貞子（後に本多監督の夫人となる）は東京にて一致教会の信徒となりしが、当地に帰りてより我教会のために熱心を以て伝道を助けられたり」（『日本メソジスト盛岡教会五十年記念誌』『宣教百年』、日本キリスト教団盛岡松園教会、1982年、八五頁。）

注35 青山学院編『本多庸一』青山学院発行、昭和四三年、p.112.

注36 矯風会副会頭としての貞子の活躍は、日本キリスト教婦人矯風会編『日本キリスト教婦人矯風会百年史』（ドメス出版、1986年）などを参照のこと。

注37 青山学院編『本多庸一』青山学院発行、昭和四三年、p.111.

注38 志家学校 同村字帰命寺、明治七年十月八日設立、教場数七、教員女性二名、生徒女子六五名、卒業生徒無、授業料有、補助金配付額一円六三銭六厘、首座教員姓名 長嶺サタ。

（岩手県立教育研究所編集兼発行『岩手県教育史資料 第五集』昭和三三年、p.191）

注39 岩手県立教育研究所編集兼発行『岩手県教育史資料 第四集』昭和三二年、p.146

注40 明治十一年の時点では、共学となっている。（岩手県教育調査研究所編集兼発行『岩手県教育史資料 第六集』昭和三三年、p.169）

注41 岩手県教育調査研究所編集兼発行『岩手県教育史資料 第六集』昭和三三年、pp.141-142.

注42 （岩手県教育調査研究所編集兼発行『岩手県教育史資料 第三集』昭和三二年、p.66）

ここでは米沢よね、半沢ときの名が記録されている。

注43 岩手県教育調査研究所編集兼発行『岩手県教育史資料 第三集』昭和三二年、pp.87-88.

注44 （岩手県教育調査研究所編集兼発行『岩手県教育史資料 第二集』昭和三二年、p.11）

注45 片山ミヨは、志家村紺屋町で嘉永年間から約二十年余り、寺子屋を開業した。また、米沢ときも同じく志家村で嘉永年間から明治初期まで寺子屋を開いていた。『岩手県教育史資料 第一集』（昭和三一年、pp.33-35）に記載されているこれらの内容は、明治十六年に文部省が各県に提出を要請した寺子屋取調表に基づく。ところで、同書に記載されている内容によると、幕末から明治初年にかけての岩手県下の寺子屋のうち、女性教師が教育を担当したのはわずか3校であり、そのうち二つが片山ミヨ及び米沢トキによる志家村の寺子屋であった。岩手県下初の女子小学校が志家村に設置されたのは、こうした背景にもよると考えられる。

注46 明治九年六月二三日 志家学校教師補申付但為手当月々金二円五拾銭支給 長嶺さた

(岩手県立教育研究所編集兼発行『岩手県教育史資料 第四集』昭和三二年, p.60)

志家学校の教師は長嶺サダが着任する以前も、若干の異動があった。明治八年七月三日に米沢ひさという人物が教師助手となり(岩手県教育調査研究所編集兼発行『岩手県教育史資料 第三集』昭和三二年, p.32)、翌明治九年二月十九日に菊池ひさが辞職している(岩手県立教育研究所編集兼発行『岩手県教育史資料 第四集』昭和三二年, p.57)。この米沢ひさと菊池ひさは同一人女性とも思われるが、どの様な人物であったのかは不明である。

注47 岩手県教育調査研究所編集兼発行『岩手県教育史資料 第三集』昭和三二年, p.86.

注48 米沢ときは、明治八年六月の時点で給与が三円であり明治八年十月十四日の教師等級では四等教師にあたる。また米沢は明治十一年の時点でも同校の教職にあった。(岩手県教育調査研究所編集兼発行『岩手県教育史資料 第六集』昭和三三年, p.169) 明治十三年には志家私学の教師となっている。

注49 (岩手県教育調査研究所編集兼発行『岩手県教育史資料 第二集』昭和三二年, p.11)

注50 岩手県教育調査研究所編集兼発行『岩手県教育史資料 第二集』昭和三二年, p.11

注51 里川口村字川口町に平野七右衛門という人物が文政年間から開いていた寺子屋で、毎日午後二時より三時まで、唱歌と礼式を一日置きに教えていた。(岩手県教育調査研究所編集兼発行『岩手県教育史資料 第一集』昭和三一年, p.62)

注52 岩手県教育調査研究所編集兼発行『岩手県教育史資料 第六集』昭和三三年, p.57.

注53 「東京女子師範学校江入校願[東京女子師範学校ニ於テ校費生徒募集に付、盛岡鷹匠小路二八番地長嶺サダ、同馬場小路一番地菊池乃婦入学志願ヲ以上京致度段出願] (岩手県教育調査研究所編集兼発行『岩手県教育史資料 第六集』昭和三三年, p.46)

注54 岩手県教育調査研究所編集兼発行『岩手県教育史資料 第八集』昭和三四年, p.71. 但、提出先は不明である。

注55 岩手県教育調査研究所編集兼発行『岩手県教育史資料 第八集』昭和三四年, p.130.

注56 岩手県教育調査研究所編集兼発行『岩手県教育史資料 第九集』昭和三四年, p.134.

注57 岩手県教育調査研究所編集兼発行『岩手県教育史資料 第九集』昭和三四年, pp.172-173.

注58 岩手県教育調査研究所編集兼発行『岩手県教育史資料 第九集』昭和三四年, p.174.

注59 中村理平『洋楽導入者の軌跡—日本近代洋楽史序説』1993年, pp.512-514.

注60 『東京女子高等師範学校六十年史』p.44.

注61 岩手県教育委員会編『岩手近代教育史』第一巻, 昭和五六年, pp.781-782.

(1998. 7 .31受理)